僕のパーティーが戦闘中に誘惑してくるので世界が救えない

上田ながの
挿絵／空維深夜

立ち読み版

あとみっく文庫

♥シオン＝
ルマ＝ファスリアス
魔王を倒すための旅を続ける
勇者。普段はおっとりとした
優しいお姉さん。
♠サラ＝ドレトリス
シオンの仲間で、大剣を豪快に
振り回して敵を蹴散らす女戦士。

PARTY MEMBER 登場人物紹介

◆エメリー＝フォン＝レームリア

シオンの仲間で、様々な魔法を使いこなす優秀な魔導師。

♣リオ＝アスティアン

魔導師だった両親に憧れ、自分も同じ道を歩むべく魔法の修行に励む少年。

「え？　あ、シオン様……」
意識を失っていたシオンが目を覚ましたのは、ちょうどこの時だった。
勇者は目覚めてすぐに仲間の劣勢を理解したらしく、ゆっくりと立ち上がる。だが、かなりダメージがあるらしく、その足取りはおぼつかないものだった。これでは剣を振るったところでゼノギウスの身体を斬ることは不可能だろう。
「無理ですそんな身体で……」
「それでも……やらなければならないのです。私は……勇者ですから」
そう言って彼女は笑った。が、その笑みは弱々しい。その顔を見るだけで、まずはダメージを癒やさなければならないとリオは思った。しかし、回復ができるエメリーは……。
（僕の……僕のせいだ……）
いくら敵が両親の仇とはいえ、我を忘れて飛び出すなど勇者の仲間としてしてはならないことだった。
そのせいでシオンは傷つき、エメリーまで……。
「う……ううう……」
自然と涙が溢れ出してくる。
「あらあら、泣いてはいけませんよ」
しかし、涙はシオンによって拭われた。

「シオン……様？」
「うふふ。リオくんは私の仲間なのですよ。勇者パーティーの一員が泣いたりしちゃいけません」
「でも……僕のせいで」
「……そのことはいまは気にしないで下さい。キミが我を忘れるくらいですから、きっとよっぽどのことがあったのでしょう。それは今度聞かせてもらいます。ですからいまは、あいつを倒すことだけを考えなければなりません」
「あいつを……倒す？」
でもどうやって？
どうすればこの絶望的な状況を覆せるというのだろうか？
分からない。分からない分からない。
気がつけば縋るような視線をシオンへと向けてしまう。仇を前にしても人の手を借りなければ何もできない……。そんな自分が情けなかった。いや、というよりも悔しかった。
そんなリオからの視線を受けつつ、勇者は何かを思考した後、やがて何かを決意するような表情を浮かべた。
「何か……思いついたのですか？」
「……一か八かではありますけどね」

うふふっと微笑みを浮かべる。
「な……なんか思いついたのかよ？　だったら早くしてくれ。このままじゃ……ちっ！　くうう……あ、あんま保ちそうにねぇぞ！」
「分かってます。でも……もう少し……もう少しだけ耐えてサラ！」
「……分かった。お前がそう言うなら……くっ……ちいいいっ！　きっと正しい選択なんだろ？　だったら信じてやるよ。信じてやるから……は……早くしてくれよな」
「分かってます」
ゼノギウスと戦い続けるサラに対して頷くと、シオンは真っ直ぐリオを見つめてきた。
「シオン様？」
いったいなんだろうか？
首を傾げた瞬間――
「んちゅっ！」
「――ッ!?」
唐突にキスをされた。
まさかの出来事に瞳を見開き、硬直してしまう。
「なっ！　なななな――お、おいっ！　てっめ、シオン！　何やってんだ!?」
戦うサラですら驚く始末である。

けれどシオンは彼女の疑問には応えず、そのままこちらの口腔に舌を挿し込むと、貪るようにキスをしてきた。

んっじゅっ……。くちゅっ！　ちゅっちゅっちゅっ……。んっじゅ……。ちゅぶううっ。

口内をまさぐるように舌が蠢く。

「んちゅろっ！　ちゅぶるっ……。もっふ……んもっ……もふぅうう……」

いまが戦闘中だということも忘れたように、そのキスはねっとりとしたものだった。ただ舌で口腔をかき混ぜてくるだけでなく、時には頬を窄めて吸引し、時には唾液を流し込んだりしてくる。下唇を甘噛みしながら、チュウウウッと吸ってきたりもした。

「あっふ……はぁあああ……」

こんな状況だというのに、どこまでも情熱的なキスによって全身から力が抜けていく。身体中――特に下腹部が条件反射のように熱く火照りだすのを感じた。

シオンはそんなこちらの身体を強く抱き締めつつ、キスを続けたまま地面に押し倒してくると、こちらの下腹部に手を伸ばし、ズボンを器用に脱がしてきた。

これまでの経験のお陰なのか、その動きは実にスムーズなものであり、あっさりとペニスは剥き出しにされてしまう。

露わになった肉棒は、キスだけしかしていないというのに、既にいまにも爆発しそうなほどに屹立していた。

「ちょ……マジ⁉　おまっ……な、何やってんだよシオン⁉　ってかでかっ‼　え？　ま……マジで？　リオ……それ……でかすぎだろ……う、嘘だろおい！」
「勇者……貴様！　ふざけているのかぁっ‼」
これにはサラだけでなく魔族すらも怒りの声を上げる。
「そ……そうですよシオン様……。どうしていきなりこんなことを？」
わけが分からない。さっぱり理解できない。だから勇者が唇を離すと同時に問う。するとシオンは「私を信じて下さい」とだけ言ってきた。疑問には答えてくれない。
「わ、分かりました」
だが、勇者がそう言う以上信じるしかない。
リオも覚悟を決める。
「うふふ。ありがとう。それじゃあ……」
騎士服の中に手を突っ込むと、勇者はショーツを脱ぎ捨てる。因みに今日の下着の色は彼女にしては珍しく白だった。
そのまま彼女はこちらの身体に跨がってくる。
「シオン……お前……まさかそれって……嘘だろ？　こ……こんな状況でするのか⁉　ここ……こういうところですることだっけそれって？」
かなり動揺しているらしくサラの声は震えていた。とはいえ、それでもしっかり魔族と

の戦線は維持しているのは流石である。
「勇者⁉　それはおかしいだろ勇者ぁあああっ！」
いや、もしかしたらそれは魔族も動揺しているお陰なのかも知れない。
「挿入れるわね」
そんな二人の怒声を聞きつつ、シオンは勃起した肉棒に手を添えると、先端部にクチュッと膣口を添えてきた。
「んっふ……」
花弁の柔らかな感触が伝わってくる。既にそこはぐっしょりと濡れていた。溢れ出す愛液が肉茎を伝って垂れ流れ落ちていく。なんだかいつもよりも濡れているように感じた。
「ふふ……。グショグショでしょ？　私ね……戦うとこんな風に濡れちゃうんです。いつも……戦いのたびにおま〇こをグショグショにしていたんですよ」
ボソッと耳元で囁かれた。
その響きが堪らなくイヤらしくて――
「あんっ！　凄い……。また大きくなった」
肉棒はビクンッと震えつつ、更に大きく膨張していった。
「す……すみません」
「謝る必要なんかないですよ。嬉しいです。では……今度こそいきますね」

ぐっじゅっ……。じゅずぶううっ！

そして腰が下ろされる。

「んっひ！　あっあっあっ……ひんんんっ!!　来た……あああ。挿入って……。挿入ってきました。私の膣中に……はぁっはぁっはぁっ……り……リオくんのおちんちんが挿入ってきましたぁ♥」

一気に膣奥まで、肉槍が呑み込まれていった。

愛液でドロドロになった肉壺が、キュウウッとペニスを締めつけてくる。すぐにでも射精してしまいそうなほどの性感にリオは身悶えた。

「マジでやりやがった……。オレ達にできないことを平然とやってのけるってレベルじゃね～ぞおい！　正気かシオン!?」

サラの疑問ももっともだろう。

何しろいまは戦闘中である。

「もちろん……。んっく……私は本気よ。だから……あっあっ……もう少し……もう少しだけま……待ってちょうだい。必ずそいつを倒してみせるから」

「倒してみせるって……その状況でどうやって？　って……まぁしゃーねぇ。お前がそう言うなら信じてやるよ！　オレとお前の仲だからな！」

「ふふ……。サラのそういうところ……大好きよ」

前に一度話を聞いたことがある。シオンとサラは幼い頃からの幼馴染みだったらしい。将来勇者になることを定められたシオンを守る為に、サラは戦士になったそうだ。

だからだろうか？　このような状況であっても本気で勇者を信頼しているように思えた。

「それじゃあ……。サラの為にも早く終わらせるわよ」

「は……はい！」

何がなんだか分からないけれど、サラだって信じているのだから、自分も信じなければならない。だからシオンの言葉にはっきりと頷く。

「ありがとうリオくん。それじゃあいきますね」

ぐっじゅっ！　じゅぶっ！　ぐっじゅぐっじゅぐっじゅぐっじゅっ！

ゆっくりと勇者は腰を振り始める。肉壺を収縮させ、肉襞で激しくペニスを締め上げながら、ここが戦場だということも忘れたように淫らに腰をくねらせ始めた。

「あっんんん！　や……やっぱり大きい。リオくんのおちんちん……ちょっと動いただけで……凄く感じる。あああっ！　はぁっはぁっはぁっ……どう……ですか？　リオくんも……リオくんも感じていますか？」

「は……はい……。感じます。凄く気持ちよくて……すぐに……。すぐに射精ちゃいそうです」

まだ挿入れたばかりでしかないけれど、普段以上に愛液を分泌させ、ブルブルと肉茎に

絡みついてくる膣壁の感触に、すぐさま抑えがたいほどに射精感がわき上がってくる。
「そう……。いいわ。射精して。私も……んっんっんんん……。き、気持ちよすぎて……あっあっ……すぐに……すぐに絶頂ってしまいそうですから。射精して。射精して下さい。私の膣中にたくさん射精して!!」
するとシオンは射精を促すように、更に腰を大きく振り始めた。
じゅっぽじゅっぽじゅっぽじゅっぽっ！
戦場に淫らな水音が響き渡る。
「届く♥ 奥まで……おっく……私の奥まで届きます。リオくんのが届いて……。あっあっ……ご、ごつごつって子宮を叩いてきます。んんんん……。いい……き、気持ちいい。こっれ……凄くいい」
「僕もいいです。シオン様……これ……あああ……。感じます。シオン様の膣中……あったかくて……僕……僕ぅううっ！」
腰が蠢くたびにきつくなる肉棒の締めつけ。襞の一枚一枚で竿やカリ首を撫で上げられるたび、性感は増幅していく。射精したい。たっぷりシオンの膣中に肉汁を流し込みたい。そんな欲望が膨れ上がってくるのを感じた。
もっと気持ちよくなりたいと本能が激しく訴えてくる。その欲求に促されるように――
どじゅうっ！

「んひいいいいっ！」

気付けばリオも腰を振っていた。

ズンズンズンッと下から突き上げるように、シオンの膣奥を何度も肉先で叩く。

「くひいいっ！　あああ！　す……凄い！　こっれ……奥……まだ……まだ奥までくっる！　駄目！　あああ！　凄い！　そんな奥まで……あっあっ……潰れる。これ……子宮が潰れちゃいそうです。なのに……んっひ！　ふひィいいいい！　いい♥　いいです♥奥を……奥を突かれるの凄すぎるぅうう♥　こんなの……あんっあんっ……こん、なっの、き……気持ちよ……す、ぎて……あっ♥　あっ♥　あっ♥　こっれ……絶頂く！　私……すぐに……すっぐに、絶頂っちゃいますぅうう♥」

「はぁっはぁっはぁっ……射精ます。絶頂きます！　これ以上我慢できない。シオン様の……シオン様の膣中に射精してしまいます！」

「い……いい。いいですよ♥　膣中に……んっんっんっ……膣中に射精して下さい。たくさん！　たくさんリオくんのせーえきを私の膣中に射精してくださいぃい♥　絶頂きますから！　私も……私ももう絶頂きますからぁあ♥」

じゅっばっ！　どじゅばっ！　どじゅっどじゅっどじゅっどじゅっどじゅっ!!

共に絶頂を訴えながら、互いに快楽を欲して腰をくねらせあう。

気持ちいい。ただひたすら気持ちいい――ここが戦場であるということさえも一瞬では

あるけれど忘れてしまいそうになるくらいの性感を覚えた。
「射精ます！　射精る！　射精る射精る射精る射精る射精る！」
最早射精感を抑え込むことなどできない。
「来て――だ、射精して！　私の……私の膣中に射精してくださいぃぃ♥」
瞬間、目の前が真っ白に染まり――
どびゅっ！　どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅ……ぶびゅるるるぅっ!!
肉先が爆発した。
「あああ！　来た！　きたぁあああ♥　なっか……膣中に……熱いのが！　あっあっあんんん！　リオくんの熱いのが来ました♥　凄い……ドクンッドクンッて私の膣中で震えてる♥　あっあっあっ！　こっれ……これ……絶頂く！　絶頂っく♥　私……私ぃぃぃぃ！　膣中射精し……たくさん膣中射精しされていぐぅううう♥♥♥」
膣中を一瞬で満たすほど多量の肉汁を流し込む。ドクンッドクンッと脈打つ肉茎。この痙攣に合わせるように身体を震わせながら、シオンも絶頂に至った。
「ふっひ♥　ひっ♥　ひっ♥　むひぃぃぃぃぃ♥」
ぶしゅっ！　じゅばあああっ！
結合部からまるでお漏らしでもしたみたいに愛液が噴き出す。
勇者はその顔を快楽で歪めながら「あはぁあああ……」開いた口から熱い吐息を漏ら

し、響かせた。
「舐めるな！　我を舐めるなぁあああっ!!」
その瞬間、いままでサラと剣を合わせていたゼノギウスが絶叫を上げる。同時に凄まじい魔力が魔族の肉体から解き放たれた。
「しまっ！　うあぁあああああっ!!」
まるで爆風のように魔族の肉体から放たれた衝撃波によって、サラが吹き飛ばされる。
「人間ごときが……この我を……俺を……コケにしおってぇえええええっ！　殺す！　必ず殺してくれるぅううっ!!」
目の前でセックスをされたという事態に、余程腹を据えかねていたのだろう。凄まじいまでの殺気を噴出させながら、絶頂の余韻に浸るこちらへと魔族は突っ込んでくる。
「あ……ま……不味い……。し……シオン……シオン様！」
慌てて自分に跨がる勇者に声をかけた。
「はぁっはぁっはぁっ……。はふぁああ……♥」
だが、未だにシオンは絶頂後の余韻に浸っている。
「シオン様！　シオン様!!」
「おいシオン！　正気に戻れシオォオオオオオンッ!!」
サラも絶叫する。

「その……なんというか、最近のリオ……なんだか仲間になったばかりの頃と同じくらい元気がないように見えてな。ちょっと前までは調子がよさそうだったのに……。どうかしたのか？」
「それは……その……」
「よかったら話してくれないか。私はシオン様やサラみたいに頼りにならないかも知れないが……」
「そ、そんなことはありません！」
少し自信なさそうにエメリーが俯く。なんだかそんな姿は見ていたくなくて、すぐに彼女の言葉を否定した。
「そっか……ありがとう」
嬉しそうに魔導師は微笑む。その笑顔にリオは一瞬見惚れた。
「それじゃあ……聞かせてもらってもいいか？」
「……はい」
もうこうなった以上黙っていることはできない。
エメリーの言葉に頷くと共に、リオは最近悩んでいることを彼女に語った。
魔導師としてみんなの力になりたいのに、自分は魔法を使うことがまるでできない。勉強は頑張って、知識はあるのに、どうして魔法が使えないのか？　自分には才能というも

のがないのではないか？　もしこのままずっと魔法が使えないのであれば、自分はパーティーを離れた方がいいのではないか？　ということを……。

「なるほどな」

話を聞き終えたエメリーは頷くと――しばらく考え込むような表情を浮かべ、その後、急に立ち上がった。そしてこちらに手を差しだしてくる。

「え？」

「ちょっと私についてこい。見せたいものがある」

そういったエメリーは微笑んだ。

見せたいもの？　それはいったいなんだろうか？

「分かりました」

気付けば彼女の手を取り、立ち上がる自分がいた。

そうして連れていかれた先は、エメリーの部屋だった。

「え……こ、これは？」

部屋に入った途端、リオは立ち尽くしてしまう。

何故ならば、宿の部屋の中はたくさんのぬいぐるみやお花で埋め尽くされていたからである。一言で言うならファンシー♥　といった具合だ。

「ん？　どうした――って、しまっ!!」

慌ててエメリーはこれを隠そうとするが、今更遅い。しばらくワタワタとした後、やがて魔導師は諦めるようにがっくりと肩を落とした。
「私はな……昔からこういう可愛いものが大好きだったんだ。だからその……宿に部屋を取るたび、こうして飾りつけていたんだよ。笑いたければ笑え」
因みにぬいぐるみや花は常に魔法のバッグに入れて持ち歩いているらしい。
「笑ったりなんかしませんよ。でも……なんかちょっと可愛いです」
「か……からかうな馬鹿っ！」
顔を紅く染めるエメリーはやはり可愛らしかった。
「って、そんなことよりほら、これを見ろ！」
羞恥を誤魔化すように、エメリーはバッグの中から〝ソレ〟を取り出し、こちらへと突きつけてきた。
「え？　これって……」
ソレを見た途端、リオは驚きに瞳を見開く。
何故ならばソレは――リオがいま腕につけている母の形見の腕輪とまったく同じものだったから……。ただし、理由は分からないが腕輪は二つに割れている。
しかし、何故エメリーがこれを持っているのだろうか？
「リオはこの腕輪がどういうものか知っているか？」

「いえ……」
「これはな、魔力固定輪（マジックフィックスリング）というものだ」
「魔力固定輪……ですか？」
「その名の通り装着者の身体に魔力を固定する為のものだ」
「魔力を固定？」
　さっぱり意味が分からない。
「まぁよく分からないだろうな。当然だ。魔力固定なんて普通の人間には必要がないことなんだから。だがな……私やリオみたいな人間には必要なものなんだよ」
「僕やエメリーさんみたいな人間ですか？　それって……え？」
　自分とエメリーに共通点があるとは思えず、首を傾げる。すると魔導師は「つまり、普通の人間に比べて魔力量が多すぎる人間ということだよ」と言って笑った。
「僕の魔力量が多すぎる……ですか？」
　シオンにも似たような話を聞かされたけれど、やはりいまいち信じられない。
「信じられないか？　だが事実だ。リオの魔力は多い。自分で言うのもなんだが、勇者の護衛役に選ばれるほどの魔導師である私と比べても遜色がないくらいにな」
　だったらどうして魔法を使うことができないのだろうか？
「その理由は簡単だ。魔力量が多すぎるから制御できないんだよ。ちょっとでも力を使お

うとすると、魔法という形になる前に身体から魔力が噴出してしまうんだ。多分、リオのご両親はそのことに気付いていたんだろう。だからその腕輪をお前に残したんだろう」
強すぎる、大きすぎる魔力を制御できるようにする為に、肉体と魔力の結びつきを強化するもの――それが魔力固定輪であるとエメリーは語ってくれた。
「いまはまだ魔力と肉体の繋がりを強くしている段階なんだ。だからリオはまだ魔法を使うことができない。しかし、いずれ必ず使えるようになる。それは間違いない。私の腕輪みたいにそれが二つに割れた時、リオは立派な魔導師になれるんだよ」
「ほ……本当ですか？　本当に僕が立派な魔導師に？」
「ああ、私が保証してやる。だって……私も昔はリオと一緒だったんだからな」
「僕と……一緒……。エメリーさんが……」
「そういうことだ」
ニコッと笑いながらエメリーが頭を撫でてくれる。伝わってくる手のひらを感じていると、なんだか自信がわき上がってくるようだった。
（僕でもなれる？　エメリーさんみたいな魔導師に……）

＊

「なんか今日は機嫌がよさそうだなリオ」
「そうですね。なんていうか……いつにも増して自信みたいなものを感じます。何かいい

ことでもありましたか？」
「まぁ……ちょっと。っていうか、今晩はどうしたんですか？　二人揃って僕の部屋に来るなんて……」
宿に泊まる場合、普段ならばシオンかサラの部屋、そのどちらかに自分が出向くはずなのだが、今日は何故か二人の方が揃ってリオの部屋にやってきていた。
「どうしたって。その……なんつーかさ、最近お前ちょっと前みたいに落ち込んでそうだったからさ」
「いつも私達が元気づけてもらってますからね。偶には私達が元気づけてあげようと思ったんです。迷惑じゃなければですけど」
「え……あ……め、迷惑だなんてそんなことありません！　嬉しい。嬉しいです!!」
本心からの言葉である。
二人も自分のことを見ていてくれたのだ。そう思うと、胸の中に熱いものが込み上げてくるのを感じた。
「うふふ……。さて、それじゃあ早速始めましょうか♥」
妖艶な笑みをシオンが浮かべる。

ちゅっぱ……。ぐじゅっ……。ちゅっぷちゅっぷちゅっぷ……。んちゅるぅ……。

淫猥な水音が室内に響き渡る。
「んっふ……。むちゅうっ……んれろっ……。んふふ、ろう？　きもひいいれしゅか？」
「ちゅれろっ……。れろっれろっれろぉおおっ……。んっふうう……。はぁっはぁっはぁっ……すげぇピクピク動いてるぞお前のちんこ。そんなに……んれろっ……くちゅうっ……か、感じてるのか？」
音色を奏でているのはシオンとサラの二人だった。
勇者と女戦士の二人は剥き出しになった肉棒に顔を寄せ、二人同時にペニスに舌を這わせていた。
シオンの舌が亀頭を舐め回し、サラの舌が肉竿をなぞり上げてくる。それだけでなく、時には二人同時に肉先にチュッチュッチュッと口づけをしてきた。ペニスを中心にして、二人がキスをしているようにも見える。そんな姿を見ているだけで、肉棒はより大きく膨れ上がっていった。
「あああ……き、気持ちいい。お……おちんちんが溶けちゃいそうなくらいです」
ペニスの膨張に合わせるように性感も大きくなっていく。ペニス全体を責め立てるような勇者達の愛撫。下半身がドロドロに蕩けていくような気がした。
「しょうか……にゃら……もっと……ぺろっぺろっ……もっろ……もっろきもひよくしてやるかりゃな……。んっもっ……んじゅっ……ふもぉおおっ」

宣言と共にサラがペニスを喉奥まで咥えていく。
「ああ……もう……サラだけずるいです。でも……だったら私は……ここをこうします……んもっ……。もっぷ……。んちゅっ……。もっもっもぽぉおお」
「あああ……そ、そんなところまで!!」
女戦士に対抗するように、勇者が睾丸を口に含んできた。優しく優しく、ねっとりと舌を這わせながら、チュウチュウと吸い立ててくる。
「んっふ……。しゅげぇ……。まらちんこ大きくなっへきら……。しょんにゃにきもひいいのか？　んふふ……いいりょ……。もっろきもひよくしへやる。んっじゅ……。もじゅっぽ！　んじゅっぽんじゅっぽんじゅっぽんじゅっぽっ！」
愛撫に反応してビクビク震える肉棒に嬉しそうな表情を浮かべると、サラはより喉奥まで肉棒を咥え込んできた。そのまま口腔全体を使って肉棒を扱き始める。
じゅっぽじゅっぽじゅっぽと刺激されるたび、ペニスはより大きく、硬く膨れ上がっていった。
「はふぅうう……。凄い。リオくんのおちんちん……まだ大きくなる。こんなの……はぁはぁ……んっちゅ……れろぉ……。こんなの見せられたら我慢できない。私にも……私にも咥えさせて……」
「んんっ……仕方ねぇなぁ……。にゃら……一緒にやりゅぞ」

「ええ」
シオンとサラは頷きあうと、交互にペニスを咥え始める。時には二人同時に肉竿を唇で左右から挟み込みながら、唇と舌で擦り上げてきたりもした。
美女二人による同時口奉仕――とてもではないが我慢できない。
「射精ます。これ……もう……もう射精ちゃいそうです」
すぐに抑えがたいほどの射精衝動がわき上がってきた。
「いいじょ……んっじゅ……。もぶっ……らへ……。らひていいじょ」
「ええ……。たくしゃん……ちゅれろっ！　ぺろぺろ……射精して下さい♥」
射精を促しながら、二人同時に肉先に口唇を押しつけてくる。
「で……射精るっ!!」
ぶびゅばっ！　どっびゅっ！　どっびゅどっびゅどっびゅ――どびゅるるるぅっ!!
途端に意識が飛びそうになるほどの性感が広がり、多量の肉汁が溢れ出した。
「あっぶ！　はぶあああっ！」
「くひっ！　んんんんっ!!」
二人に肉汁がべっとりとこびりつく。射精量は尋常ではなく、まるで精液でパックでもしたように勇者達の顔はドロドロのぐっちょぐちょに染まった。
「はっふ……。あはぁあああ……。凄い……これ……すごい量……。熱くて……臭い」

「お前……はぁっはぁっはぁっ……い、いくらなんでも射精しすぎだろ……」
「ご、ごめんなさい」
「いや……別に謝る必要は……ね……ねぇよ……。はぁあああ……。その……こんだけ射精すくらい気持ちよくなってくれて嬉しいし……」
「サラが言う通りですよ……。んふぅうう……。そ、それにしてもサラ、貴女……酷い顔ですよ」
「それはこっちの台詞だっつの。お前も……ザーメンでグチャグチャだ」
二人はペニスを挟んで互いに見つめあうと――
「んじゅっ！　ふじゅるっ……。んじゅじゅっ……むじゅううっ」
「はっぷ……はんん！　ごっきゅ……ごきゅっごきゅっ……はふぁあああ……」
やがてどちらからともなく互いの顔にこびりついた肉汁を舐め取り始めた。
ぐちゅっ……。ちゅぶるっ……。れろっれろっ……んちゅるるぅ……。
舌先で肉汁を搦め捕り、それを躊躇なく嚥下（えんげ）していく。
サラの舌がシオンの鼻筋をなぞり、シオンの舌が白濁に塗れたサラの眼帯をなぞった。
（二人が僕の……僕の精液を舐めあってる……。シオン様とサラさんの二人が……）
あまりに性的に過ぎる姿である。
この姿を見ているだけで、再び肉棒が膨れ上がってしまう。抑えることなどできない。

「んっっぐ……ぷはぁあああ……。はぁっはぁっはぁっ……お？　なんだ？　射精したばっかりなのに……はぁはぁ……また興奮してきちまったのか？　ホントお前って、見かけによらず……え、エロいよな」
「本当ですね。はぁあああ……。でも、嬉しいです。これって……私達と……エッチなことをもっとしたいってことですよね？」
肉棒を見つめながら、二人は同時に舌なめずりをした。
「はい……したいです」
「そうですか……。それじゃあ、どんな風にしたいですか？　なんでも言って下さいね」
「リオがしたいようにさせてやるよ」
したいように……。
ゴクッとリオは生唾を呑むと――
「そ、それじゃあ……」
自分の欲望を伝えた。

「まさか……こんな風にしたいなんて……」
「リオって結構変態だよなやっぱり……。でも、いいぜ。ほら、こいよ。オレ達を好きなように犯してくれ」

ベッドの上で四つん這いになった二人が尻を突き出し、フリフリと左右に振ってくる。どちらの尻もむっちりと張りがあり、頬ずりしたくなるほどに瑞々しい。

当然花弁も剥き出しになっている。先程の口奉仕で十分興奮しているらしく、既に秘裂は左右にクパッと開いていた。晒される肉襞は愛液で濡れそぼっている。ゆっくりと呼吸に合わせるように開閉を繰り返す膣口に、より興奮を煽られていくのを感じた。

「では……その……さ、最初はサラさんからいきますね！」

「よっしゃっ!!」

「うう、サラ……羨ましいです」

まずはサラの花弁に肉先を押し当て、躊躇なく挿入する。

じゅっぽ……。ぬじゅぽおおっ！

「あああ♥　んっふ……あああ！　来た！　オレのな……かに……はぁっはぁっはぁっ……リオのが……リオのちんこがきたぁ♥　き、気持ちいい。すげぇいい！」

性感を証明するように、ジュワアッとただでさえ濡れた結合部からより多量の愛液が溢れ出す。もっと奥まで肉棒を突き込んでくれ――と訴えるように、肉竿に何枚もの肉襞が絡みついてくるのを感じた。

その求めに応じるようにリオは腰を突き出していく。子宮口に先端部が触れるくらいまで肉槍で蜜壺を刺し貫いた。

「きった♥　オレの奥まで来たぁあ♥　いい……すげぇ気持ちいいよ。はぁっはぁっ……でも、これだけじゃまだ満足しないだろ？　挿入れただけじゃ駄目だろ？　お前の思う通りにしていいぞ。オレの膣中をグチャグチャにしてくれ」

「はい！　はいっ!!」

当然挿入れただけで満足などできない。サラの言葉に何度も頷くと、リオは欲望の赴くままに腰を振り、容赦なく女戦士の膣を蹂躙した。

パンッパンッパンッパンッパンッ！

「くっは！　い、いいっ！　やっぱり……やっぱりこれ、何度してもいい♥　リオのちんこで……あっあっあっ……ま〇こをぐしゃぐしゃにされるの……すげぇ感じるぅ♥」

肉槍で蜜壺をかき混ぜると、すぐさまサラは愉悦の悲鳴を上げ始めた。

「ああ……。リオくん……。私も……私も欲しいです。はぁっはぁっはぁっ……私も……あっあっあっ……私も犯して♥」

そんな女戦士の姿を見たシオンが、自慰をしながらペニスを求めてくる。

「分かりました。いま……挿入れます！　挿入れますねっ!!」

ジュボッとサラの膣から肉棒を引き抜き、今度はシオンに挿入する。

「はぁあああああ♥　来た！　熱いのが……熱いのが来ましたっ♥　リオくんの熱いのがぁあ♥　いい！　こっれ……凄くいいです♥　気持ちいい。か……んんん……感じます」

「僕も……僕もです。僕も感じます！　シオンさんの膣中、凄く気持ちいいです！」
きつく締め上げるようなサラの膣中とは違い、ねっとりと絡みつくようにシオンの膣はペニスを刺激してくる。脳髄まで蕩けるような快楽を感じつつリオは腰を振り、シオンの肉壺も膣奥まで何度も犯した。
「あっあっあっあっあっ」
腰を叩きつけるたび、シオンは断続的に嬌声を漏らす。その声により興奮が更に煽られ、自然とピストン速度は上がっていった。
「シオンばっかりずるいぞ。オレにも……オレにも挿入れてくれよ」
「分かってます！」
頷くと共に今度はリオと繋がりあう。
「あああ♥　来たっ！　奥まできたぁあ♥」
じゅぱんっじゅぱんっじゅぱんっじゅぱんっ！
自分だけ気持ちよくなるのでは駄目なのだ。シオンにもサラにも気持ちよくなって欲しい――そんな想いに突き動かされるように、リオは何度も激しく腰を振り、二人を交互に犯し続けた。
「もう……絶頂く♥　私……私、絶頂きます。絶頂っちゃいます……。こんな気持ちいいの我慢できません」

「オレもだ……。オレも絶頂く♥　もう……んんんん！　耐えられねぇ。絶頂っく！　あっあっあっ……い、絶頂っちまうよ」
やがて二人が限界を伝えてくる。
「僕も……僕もです」
二人と同様にリオのペニスも限界に近かった。いつ射精てしまってもおかしくはない。
「いいですよ。射精して……射精して下さい。一緒に……一緒に絶頂きましょう♥」
「ああ。三人……三人一緒だ♥　さぁ、来てくれ！　射精してくれ!!」
「シオンさん！　サラさんっ!!」
じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっ！
射精に向けて二人の肉壺を何度も抉る。
そして――
「射精るっ！　射精るぅううっ!!」
「絶頂きます！　あああ！　絶頂くっ――絶頂くぅうう♥」
「くる！　気持ちいいのがくっる♥　オレ……オレぇええ♥♥」
三人同時に絶頂に至った。
ぶびゅっ！　どびゅるっ！　びゅっびゅっびゅぶるるるぅっ！
肉先から精液が放たれる。多量の濃厚汁が二人の尻を淫らに濡らした。

終章　パーティーの回復係――性的な!!

「まさかあんな魔物の中でまでエッチなことをしてるとはなぁ。ホント顔に似合わずお前ってエロいよな」
「まぁそんなところもリオくんの魅力ですけどね」
「ってか、リオがエロいのは当然として、まさかエメリーまでとはねぇ。もしかしてむっつりだったとか？」
「う……うるさいっ！　別に私はむっつりとかじゃない。リオが好きだからそういうことをしただけだ！　サラみたいないつも本能全開のエロ女とは違う！」
「あらあら、それは間違いですよエメリー。これでもサラって意外と奥手で、リオくんが初めての相手だったんですよ」
「なっ！　ちょっ！　そ……それ言うなよ馬鹿っ!!」
「え？　そうだったんですか？　へ～。ふ～ん」
「な、なんだよそれ。何笑ってんだよ。見るな！　そ……そそそ、そんな目でオレを見るんじゃねぇえっ！」
なんてやり取りをパーティー女子の皆さんが繰り広げる。

そんな彼女達を見つめるリオは、宿のベッドの上に全裸、大の字状態で拘束されていた。手足は縛られており、動くことはできない。
「あ、あの……その……話はどうでもいいんですが、そろそろこれを解いてくれても」
恐る恐る尋ねる。
「駄目だ」
が、一言のもとに却下されてしまった。
「な、なんでですか？」
「なんでってもちろん罰だからですよ。勝手にエメリーにまで手を出した罰です」
「そういうこった」
「いや、それだけじゃないぞ。これは私からの罰でもある。いままで私だけ仲間外れにしてくれた罰だ」
三人は実に嬉しそうな表情を浮かべながら、そう告げてくる。
「罰って……その……こんな格好で僕を拘束して何をするつもりなんですか？」
「何ってそりゃナニしかないだろ！」
「親父臭いぞサラ……。だが、私も否定はしない」
「うふふ……つまり、私達が満足するまで好きにさせてもらうってことです♪」
なんてことを語りながら、三人は顔を赤く染めつつ、身に着けていた騎士服、鎧、魔法

衣を脱ぎ捨てた。
三人の美しい裸体が露わになる。
たわわに実った大きな胸。張りのあるバスト。大きさはないけれど染み一つなく、見惚れるほどに美しい乳房――三者三様それぞれ魅力的な裸体に、ゴクリッとリオは喉を鳴らす。同時に肉棒が熱を持ち、硬く屹立していくのを感じた。

＊

「そ……それじゃあ始めるぞ」
「あらあら、緊張してるのエメリー？」
「そ……そんなことはありません」
「ははは……ホントおこちゃまだなぁ」
「だ……誰がおこちゃまだ！　私のどこがおこちゃまだと言うんだっ!!」
「どこって……そりゃ……」
「む……胸を見るなぁああっ!!」
などというやり取りをしつつ三人は勃起した肉棒に唇を寄せると、チュッチュッチュッとそれぞれペニスに口づけをしてきた。
「うあああっ！」
それだけで激しく腰が震えてしまう。

「おうおう、相変わらず敏感なちんこだな。ほら……こういうのはどうだ？　んれろっ！　れろっれろっれろぉっ」

こちらの反応にサラは嬉しそうな表情を浮かべると、キスだけでなく舌までペニスに這わせてくる。クチュクチュと肉棒に絡みつく舌の柔らかく温かな感触に「あっあっ」とまるで少女のように嬌声を漏らしてしまった。

「気持ちよさそうですね。それでは私も……んれろっ！　れろっれろっ……ふちゅうっ」

その姿を嬉しそうに見つめつつ、シオンもペロペロと肉棒に舌を這わせてくる。

「わ、私を仲間外れにしないで下さい！　ちゅぶっ……むっじゅ……ちゅぶっちゅぶっちゅぶっ」

当然エメリーもこれに続いた。

ぐちゅっ！　れろちゅっ！　ちゅっぷ……。むちゅっむちゅっ……ふじゅるるぅ……。

三人の舌がペニスに絡む。以前シオンとサラの二人にしてもらったことがあるけれど、そこにエメリーが加わることにより、感じてしまう肉悦はあの時以上のものだった。

蠢く舌に合わせて腰が震え、肉棒が跳ねる。肉茎に舌が絡みつくたび、ムクムクとペニスが大きく膨れ上がっていった。

「感じてるみたいだな。よし……では……確か……こ、こういうのがいいんだよな」

これを見たエメリーは意を決したように呟くと――

「もじゅっ！　むっじゅっ！　もっもっもぼぉおおっ」
小さな口を目いっぱい開き、肉棒をその口で咥えてきた。
「うあああっ！」
「んふふ……きもひよしゃしょうらな！　こうか？　んっじゅ……。こうひうのがいひのか？　んっぽんっぽんっぽっ！」
口唇全体を使って肉棒を扱いてくる。
「あ、ずりーぞ！」
「そうですよエメリー。貴方だけリオくんのを咥えるなんて。変わりなさい」
「らめでしゅ。いくらシオンしゃまの頼みでもこりぇだけはゆじゅれましぇん。らいたい、二人はこれまれ散々リオと楽しんれきたんれしょ？　もっじゅ！　じゅぽっじゅぽっじゅぽっ！」
肉棒は渡さないとばかりに喉奥まで咥えてくる。
「あああ！　駄目！　射精る！　射精ちゃいますっ!!」
その激しすぎる動きにあっという間に射精衝動は限界まで膨れ上がり――
どびゅばっ！　ぶびゅっ！　どっびゅどっびゅ――どびゅるるるぅっ!!
「おぼっ！　むっむっむぼぉおおおっ！」
エメリーの喉奥に向かって肉汁を撃ち放ってしまった。

「しゅごい……こんにゃにれりゅなんて……」
「あ、ご……ごめんなさい」
「んふふ……あやまりゅひちゅようはないじょ……。むひろうれひい……。んごきゅっ！ごきゅっごきゅごきゅううっ」
謝罪に対して微笑むと、エメリーは躊躇なく肉汁を飲み始める。ゲホッゲホッと何度も咳き込みつつも、白濁液をすべて飲み干してくれた。
「はぁっはぁっはぁっ……けぷっ……。お、おいひかったじょ♥」
口周りを唾液や白濁液で汚しながら笑う。その姿はあまりに淫靡であり、見ているだけでリオのペニスは萎えるどころかより硬くたぎっていった。
「しゅごい……。まだ……はぁはぁ……こ、こんなに大きい……」
「あらあら……嬉しいわ。それじゃあ今度は私の番ね」
「いや、オレも一緒にやらせてもらうぞ。エメリーにはできないことをやってやる」
「わ……私には……で、できないこと？　ふうっふうっ……な、なんだそれは？」
「見てれば分かる。なっ！　シオン」
「ええ♪」
そう言うと二人は屹立に胸を寄せ、乳房で左右から挟み込んできた。柔肉がグニュッと肉竿に押しつけられる。

「ふわわぁあああ」
柔らかく温かい。それでいて張りのある感触。まるで膣に挿入した時のような快感を覚える。下半身が溶けてしまうのではないかとさえ思った。
「んふふ……ちゅっちゅっ……ちゅれろっ……。むふうう……はぁっはぁっ……どう？気持ちいいでしょ？」
「ちゅぶっ！　もっじゅ……んじゅうっ！　こんなこと絶対にエメリーじゃできねぇぞ。むじゅるっ！　ちゅっぽちゅっぽちゅっぽっ」
もちろんただ挟み込むだけでは終わらない。当然のように乳房でペニスを扱いてきた。同時に舌を伸ばし肉先に奉仕までしてくる。
「むっ！　むむむっ！　わ……私だって……私だってそ……それくらいできるっ!!」
この様を見たエメリーは悔しそうな表情を浮かべると、その平べったい胸を押しつけてきた。二人みたいにグニュッと柔肉が潰れるような感触はほとんどない。
「それじゃ全然駄目だなぁ」
「黙れ！　ほら……んっんっんっ……どうだ？　気持ちいいか？　リオ……私の胸……お、おっぱいはどうだ？」
それでも一生懸命身体をくねらせ、胸――というか乳首でペニスを扱いてくる。
「き、気持ちいい。気持ちいいです」

「むむむ……こんな貧乳で感じてるんじゃねぇ！　オレの方が……ほら……オレの方が気持ちいいだろ？」
「あらあら……私だって負けませんよ」
魔導師に対抗するように、勇者と女戦士もこれまで以上に胸で肉棒を扱いてきた。
ぐっじゅ！　ずじゅううっ！　ぬっじゅぬっじゅぬっじゅぬっじゅっ！
肉汁や唾液に塗れたペニスと三人の乳房が擦れあい、淫靡な音色が響く。大きな乳房とコリコリとした乳頭――二つの相反するような感触と三人が亀頭に這わせてくる舌の感触が実に心地よかった。
「あんんっ！　なんか……はぁっはぁっ……んっちゅ……れちゅうっ……んんん。これ……き、気持ちよく……あっあっ……胸でしてるだけで気持ちよくなってきてしまいます」
「オレもだ……なんか……んっく……もじゅっ……もっもっもっ……これ、はぁはぁ……身体が熱くなってく♥」
「れろっ……くちゅうっ……。んふぅうう……。これ……わ、私……絶頂きそうだ。凄い……これだけで……リオにしてあげてるだけで……ああああ……い、絶頂きそう♥」
こちらに愛撫すればするほど艶やかになっていく三人の嬌声。これがよりリオの興奮を煽り立てる。
「駄目だ。で……射精る！　射精ます！　僕……これっ！　もう射精ちゃいます‼」

「いいぞ！　射精せ！　んっじゅ……らふら……。ちゅっぽちゅっぽっちゅっぽ」
「むちゅるる……オレにぶっかけろ。ちゅぶううっ……。たくさん射精していいからな」
「れろっれろっ……んふふ。らひてくらはい。リオくんのをわたひにちょうらい♥」
ぐっちゅ……ぬじゅるっ！　じゅぼっじゅぼっじゅぼっ！
射精を促すように更に愛撫の勢いが増す。
「くあああっ！」
射精感が弾けた。
どびゅっ！　ぶじゅぼっ！　どびゅっどびゅっどびゅっどびゅううっ！
乳房に挟み込まれた肉茎が激しく痙攣し、白濁液を三人に向かって撃ち放つ。
「あぶあっ！　ぶっふ！　あああ！　熱い。熱いのが私に……んんん！　駄目だ！　絶頂くっ！　こっれ……絶頂くぅううっ♥」
「し……信じられねぇ……。おっれ……ぶっかけられただけで……あっあっあっ……もうっ！　もうううっ♥♥♥」
「熱い♥　リオくんのせーえき……はぶああっ！　あっつ、すぎる……。ひっひ、ひんんんんん♥　絶頂くの……。わったし……絶頂くっ！　絶頂くッ絶頂くッ……いぎゅううう♥」
熱液が勇者達の顔を白濁に染める。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!